

信濃国布野長命寺伝の成立

―旅と出版の時代の「由緒」について―

塩谷 菊美

キーワード…布野長命寺、野田西念、由緒書

はじめに

親鸞直弟に西念という人物がいた。覚如が定めたという「親鸞直弟二十四輩」第七番に「野田西念」として入っているので、真宗系寺誌類には必ず顔を出している。また、覚如と唯善が大谷廟堂留守職を争ったときに、弟子の覚念が唯善を推して敗れたことも判っているが、そのせいかあらぬか、この門流が真宗史の表舞台に立つことはなかった。

妙源寺本『親鸞聖人門侶交名牒』では「西念（武蔵太田住）―覚念、常陸光明寺本では「西念（武蔵之太田住）―覚念―覚善」、光園院本では「西念（ムサシノクニノタ）―覚念（唯善与同位也）」となっている^①。

武蔵国太田（野田）は、武蔵国足立郡野田、現在の浦和市野田地区である。浦和市域は、羽生市から岩槻市周辺にかけて広がっていた「太田

庄」より、やや南に外れる感じもするが、「太田庄」の名は近世にも地域呼称として使われ続けたとい^②、「新編武蔵風土記稿」足立郡寺山村（もと野田村の一部）の項には、天正頃まで岩槻太田氏の領地だったと記されているのである。

この西念の旧跡として、以下の寺院が現存している^③。

A、信濃国布野長命寺と、それに関係する寺院

長野県長野市南堀 足立山長命寺（西派）野田姓

新潟県三島郡三島町上岩井 北原坊西照寺（東派）北原姓

山形県米沢市中央 井上山長命寺（東派）井上姓

京都府福知山市野花 瑞華山長命寺（西派）花崎姓

B、下野国辺田聖徳寺や、性信の門流と関わる寺院

茨城県岩井市辺田 極楽山聴衆院西念寺（東派）明治中期まで井上姓

茨城県古河市 足立山野田院宗願寺（西派）井上姓

千葉県野田市上花輪 極楽山聴衆院長命寺（東派）井上姓

埼玉県吉川市木壳 楠井山西光院（真言宗）

C、伊勢国大別保本福寺と、それに関係する寺院

三重県安芸郡河芸町東千里 八葉山光明院本福寺（東派）先住まで

井上姓

滋賀県草津市上寺 八葉山西蓮寺（東派）上寺姓

京都府京都市上京区 安居院山西法寺（西派）野田姓

こうして見ると、「西念の門流は表舞台からは身を引いたが、地下水脈となつて各地に法の泉を湧出させた」という結論に導かれやすい。だが、散り散りになつても門流としての結集を保つたというには、誰を領袖とする、どのような教団を構成していたのか、具体的なことが見えてこない。逆に、早々に関係を解消したのなら、信濃国長命寺の由緒書に武蔵国西光院が現われ、丹波国野花長命寺伝に信濃国南堀長命寺の名が記されるのとはどういふことか（信濃の長命寺は元禄年間に布野から南堀に移つた）、説明がつかない。

真宗寺院においては、由緒書は、師から弟子に与えられ、同一人物を祖と仰ぐ集団の一員たる証しとなつたようである。門流の祖の影像の前に結集して「衆」をなす人々は、門流の祖の「子孫」として、彼の姓を名乗つた。伝授された「門流の祖に関する物語」、すなわち彼の俗姓や、真宗帰依・寺院創設の経緯などを描いた物語を、弟子たちは自坊の由緒

書の冒頭に飾り、その後自坊の創設についての物語を付け加えたりし。そのため、同じ門流に属する寺院群は、同文的な由緒書冒頭部を持つことになつた⁴⁾。

一五世紀半ばに、本願寺に蓮如が登場し、各門流を覆い尽す絶対的な力を持つようになつてから、法系は次第に重んじられなくなった。親鸞の血を継承する本願寺は、親鸞の弟子たちが継承してきた門流ごとの法の差異に、ほとんどかかずらうことなく、全国を席捲した。現代では中山本の制度も廃され、各寺が直末として本願寺に直結する。由緒や姓を以て己の属する門流を表示する意味は、時代の推移とともに失われたことになる。

由緒書作成の目的も手段も、変化したはずである。それにもかかわらず、近世を通じて由緒は説かれ続けた。そもそも、師匠からの下付がないのなら、どこから「由緒」を入手しなければならないのだが、それはどのように行われたのだろうか。

実は上記の寺院の多くは、江戸時代に西念旧跡寺院となつたのである。各寺の由緒書を分析することで、近世真宗寺院における「由緒」作成活動の実態と、それを支えた庶民の信仰のありかたを解明し、新しい文化の形として評価しようというのが、小稿の目的である⁵⁾。

一 布野長命寺『二十四輩第七番長命寺略縁起』

長野市南堀の長命寺は、元禄年間まで市内布野にあり、布野長命寺と呼ばれた⁶⁶。

その由緒は多くの真宗系寺誌類に紹介されているが、ここでは一五世勝応（住職期間一七一六～四六年）による『二十四輩第七番長命寺略縁起』⁶⁷を取り上げる。長文だが、各寺の由緒を検討する上で基本となるものなので、煩を厭わず全文を引用する。

信州水内郡柳原庄足立山野田長命寺開基西念房ハ、俗姓ハ清和天皇ノ末裔八幡太郎義家六世ノ後胤井上五郎盛長ノ息男ナリ。井上次郎道祐トテ、信濃国高井郡ノ人ナリ。幼年ノ古ヘ、父盛長亡シテ後ハ水内郡駒沢ノ郷ニ住シタマフ。然ルニ父存日ノトキ次郎ニ対シテ言ク、汝武勇ノ家ニ生ルト雖モ、父コソ止ガタキ弓箭ノ道一生ノ間殺罪数ヲ尽シ、悪業身ニアマリ死テ三途ニ墮センコト、疑ヒアルベカラズ。一子出家スレハ九族天ニ生ズトイヘル本文モアレバ、後世ノ助縁ハ汝ヨリ外ニ頼ムベキ方モナシ。願クハ出家ニモナリテ父母ノ菩提ヲモトムラヘカシト言ヒフクメシコトヲ、次郎オサナゴ、ロニモ覚エケルニヤ、イマダ少年ノコロ母ニオクレテ悲歎ノ余リツラツラ有為ノ境界ヲ思フニ、生者必滅会者定離、貴キモ卑シキモノガレ難キハ無常ナリト、切ニ発心ノ思ヒアリテ、彼ノ父ノ遺言ニモ、出家トモナリ後世ノ助縁ヲモナスベシト言ヒシ言葉ヲモ思ヒ出スニ、

無為ニ入テ恩ヲ報ズルニシクハナシト思惟シケレド、何方ヘ立寄テ尋ヌベキ師範モナケレハ、越後国居多ノ浜五智ノ如来ニ参リテ、然ルベキ智識モマシマサバ、アハセテ給ハレト、七日ノ光陰ヲオクリ、丹誠ニ祈誓スルニ、満夜ノ夢中、如来ノ光明赫然トシテ南方ヲサシテ照シ給フコト、朝日ノ窓ニサシ入ルガ如シ。道祐夢中ニシテ、此ノ光ノ至リタマフヲ見ント思ヒ南門ニ出ルニ、親鸞聖人ノ庵ニアタリテ照シタマフト覺エテ夢サメ終ヌ。奇異ノ思ヒヲナシテ晨ニ至リ彼所ニ往キテ見レバ、隠者ノ棲アリ。扱ハ此ノ庵ノ主ハ凡人ニアラズ、菩提ノ智識ト頼ムベキ御告ナリト思ヒ、御室内ヘ参リテ聖人ヲ拝シ奉ルニ、難有ク尊ク感涙禁ジガタシ。仍テ父母ノ後生ノ助クベキ旨ヲ問ヒ奉ルニ、聖人弥陀超世ノ本願惡人摂取ノ直道ヲ念頃ニ指授シタマフニ、宿善開發ノモヨホシニヤ、忽チニ信心決定シテ、鬢髮ヲソリ御弟子トナリ、法名ヲ西念房道祐トタマハリケリ。帰国ノ時、聖人九字ノ名号ヲ授ケ給フ。九拝シテ後、駒沢ノ郷ノ庵室ニ是ヲ掛ケ奉リ、自行化他怠ルコトナク、倍々専修念仏ヲ行ジケリ。ソレヨリコノカタ、十余里ノ路ヲヘテ、度々聖人ヘ参リテ給仕ヲナシマシマシケリ。建暦二年ノ春、聖人関東ニ越エ給フニ、西念房モ御供マフシ、下野国室ノ八島、常陸国河内郡小島、同国茨木郡稲田ノ郷マデ、常随給仕シ奉リケリ。然ルニ、武州足立郡野田ト言フ所ハ一門ノ所領ナレバ、此ノ所ニ坊舎ヲ起立シ、聖人ノ宗風ヲ弘メ給フ。聖人帰洛ノ時モ御供申給ヒキ。夫ヨリコノカタ、一兩年ヲヘツ、上

洛シテ拝顔シ奉リ、帰国ノ時ニ望ンテ思ヘラク、聖人ノ玉齡モハヤ傾キ給ヒ、予モ又衰老ノ身トナレハ、今生ノ拝顔コレマデト存ジトリ、別キテ此度ハ御名残りオシク思ヒヌルホドニ、形見ノタメニトテ御真影並ニ六字名号ヲ賜ハリケリ。西念歡喜ノ涙ニムセビ尊像ヲ頂戴シテ下リツ、別堂ニ安置シテ尊重恭敬懈コトナシ。其ノ聖人入滅マシマシケレバ、西念悲泣シテ言ク、聖人昔六々ノ御年、予ハ二十八歳ノ時、師資ノ好ミヲ蒙リ、面授口決ノ化導ニアズカリヌルコト、現当二世ノ恩徳、山ヨリモ高ク海ヨリモ深シ。熟々独リ往時ヲ思フニ、常随給仕ヲナセシ昔ハ夢トナリ、聖人ハ御往生マシマシケレバ、我ノミツレナク命長ラヘ、殊ニ境関万里ヲ隔テ彼ノ終焉ニ逢ハザルコト幾ノ恨ナリトテ、毎月ノ御忌ニハ御真影ノ御前ニ門弟ヲ集メテ報恩謝徳ノタメニ礼讃念仏ヲツトメタマヒケリ。正応元戌子ノコロ、法印大和尚位覚如上人東国御巡廻ノ時、西念房類齡百七歳ニ及ビ給フ。覚如上人ニ謁シマヒラセテ曰ク、故聖人ハ昔寂滅ノ雲ニ隠レ給フト雖モ、今相承ノ善知識ニ逢ヒ奉ルコト、此レ長命ノ徳ナリトテ喜ビ給フ。仍テ覚如上人御歡悦ノアマリ即チ寺号ヲ長命寺ト給ハリケリ。同二年ノ春二月下旬ノ頃ヨリ少疾有テ老体不快ニオハシマセバ、イヨイヨ口ニ世事ヲ語ラズ、仏祖ノ深恩ナルコトヲノミ思ヒ、唯称名絶ユルコトナシ。終焉ニ望デ門弟二暇ヲナシ、正応二己丑歳三月十五日午ノ正中ニ尊像ニ向ヒテ端座合掌シテ、観彼如来本願力乃至真実功德大宝海ト唱テ、竟ヒニ往生ヲトゲ給ヒケリ。

于時行年百八歳ナリ。教化ヲ受ケシ門弟、恋慕ノ余リ影像ヲ彫シテ、聖人御真影ノ傍ニ安置シ、月々ノ命日ニハ念仏勤行ヲ成シキ。アタカモ是西念御房ハ八幡ノ化現ナリト申伝ヘリト云々。当寺二世覚念坊浄空ハ西念坊往生ノ後、弥門弟ヲ集メテ専修念仏ヲ弘メ給ヒケリ。延慶二己酉年八月八日、九十八歳ニシテ往生ヲ遂ゲ給ヒケリ。三代西祐ノ時、一天両王トナリ諸国乱世ス。其時当寺院悉ク破却セラル。聖人ノ尊像並ニ御房ノ影モ賊ノ為ニ奪ヒトラレテ、西祐ハ信州ニ越ヘ、井上一家ノ者、須田八郷ニ住ス、仍テ是ヲ頼ミ、古ノ駒沢ノ郷ニ長命寺ヲ建立シ給フ。四代了順ノ時、世上納リテ、武州ニ至リテ御真影ヲ尋ネ奉ルニ、同州二郷半郡ノ内、木売川戸村西光院ニ安ズ。サマザマ是ヲ乞フト雖モ、其在所ヲ初メ隣郷ノ者共、コノ御影ヘ現世ノ祈ヲ掛ケ奉ルニ其ノ願成ゼズトイフコトナシ。聖人ノ御影トイフコトヲ知ラズ、其ノ名ヲ俗ニおむく様ト呼テ供養崇敬ス。故ニ御真影ヲハナシ奉ラズ、漸ク西念御房ノ木像ノミヲ乞ヒ得テ信濃ニ帰リキ。於今当寺ニ安置ス。聖人ノ御木像ハ彼ノ西光院ニ在ス。真言宗ノ寺ナリ。是偏ニ関東ニ留リテ、邪見放逸ノ輩ヲ濟度シ給ハンガ為ナルベシ。窃ニ以バ、真宗ノ法流ハ末世相応ノ要法、本為凡夫ノ誓願、爰ニアラハレタアマフ。十惡五逆五障三從ノ族、コノ流ヲ汲デ、帰命ノ一念ニハヤク流転ノ妄業ヲ滅シ、永ク無為安養ノ宝刹ニイタランコト、アリガタシト言フモオロカナリト、仰グベシ信ズベシ。南無阿弥陀仏。略縁起終。二十四輩七番座長命寺。当寺一五世

苾芻塵外謹書。

西念は清和源氏八幡太郎義家六世の後胤、井上五郎盛長の息男、井上次郎道祐といい、信濃国高井郡の人だが、父を亡くして水内郡駒沢郷に住した。越後国五智如来から、親鸞を師とするよう夢告を受け、弟子となつて西念房道祐と号した。駒沢に庵室を設けたが、親鸞に随従して関東に赴き、一門の所領である武州足立郡野田に坊舎を立てた。親鸞から寿像を賜り、別堂に安置して、親鸞没後は毎月の忌日に門弟を集め、報恩謝徳の札讀念仏を勤めた。正応元年に覚如が東国を巡廻したとき、西念は百七歳で、長命の徳で相承の善知識に逢えたと喜び、長命寺の寺号を賜つて、翌年三月十五日正午に往生した。門弟たちは西念像を刻んで親鸞像の傍に安置し、月々の命日に念仏勤行を修した。二世覚念坊浄空は延慶二年八月八日、九八歳で往生した。三世西祐の代に二人の王の立つ乱世となり、長命寺は破却されて、親鸞像・西念像ともに賊に奪われた。西祐は井上一家を頼んで信州須田八郷に住し、駒沢郷に長命寺を建てた。四世了順代に世が静まり、武州二郷半郡木売川戸村の真言宗西光院に真影が安置されているのを発見したが、在所の者共が親鸞像と知らぬまま「おむく様」と呼んで崇敬し、手放さないので、西念像のみ信州に持ち返つた。

勝応は、この由緒書とは別に、歴代住持についての記録もまとめている。それによれば、西祐は一三七二（応安五）年に駒沢村で没し、四世了順は一四〇二（応永九）年、五世浄祐は一四五六（康正二）年、六世

明乗は一四八七（長享元）年、七世信貞は一五二六（大永六）年に没したとする。しかし、浄祐までは実在が確認できる史料は残っていない。明乗は一四八四（文明一六）年七月二八日に、柳原庄駒沢村で蓮如から方便法身尊像を下付され、一五九三（文祿二）年九月一三日には、善勝が古野（布野）で教如から蓮如影像を下付されている^③。『遺徳法輪集』所収の長命寺伝は、この由緒書とほぼ同文だが、「七世信貞代に水内郡郡布野に移つた」と付加している^④。一四八四年には水内郡駒沢で本願寺の傘下に入り、数十年のうちに布野に移つていたのだろう。

二 武蔵から信濃へ

武蔵ですでに「長命寺」が開かれていたかどうかは、きわめて判断しにくい。由緒書は往々にして「Aという人物が武蔵に寺院aを開いた」「a寺の門徒であるBが信濃にb寺を開いた」という、時代も場所も異なる、直接には関係を持たない二つの事柄を、「Aの息（弟子）であるBが武蔵に開いたb寺は、後に信濃に移つた」あるいは「Aが武蔵に開いたa寺が、信濃に移つてとb寺と改号した」などと、一括りに表現してしまふからである。

だが、信濃に長命寺を創建した西祐が、武蔵に展開していた西念の門流にあつたことは、事実と考えてよさそうである。そう判断する理由の一是、井上氏の動き方である。

井上氏は『吾妻鏡』や『平家物語』にも出てくる信濃の名族で、『尊卑分脈』所収の系図には、北信の地名を冠する支族が名を連ねている。ただし、武蔵の地名を名字とする者はなく、西念の父とされる盛長には「井上五郎。文永五年依焼弘善光寺誅了」とあって、ここで系図は切れてしまうため、西念に相当する子息があつたかどうかわからない。だが、一四八四年までに寺号を名乗るからには、大豪族の庇護があつただろうし、長命寺やその末寺群の拡がる、水内郡北東部から高井郡は、まさしく井上氏の地盤なのである。

西念の住んでいた武蔵国足立郡野田では、開発領主野田氏が、曹洞宗明照寺の北に館を構えていたと考えられている¹⁰。この野田氏と井上氏との関係は不明だが、井上姓は野田地区を代表する古い姓の一つで、上野田の井上家の近くには諏訪神社が鎮座する¹¹。また旧野田地区大崎の井上家の墓地には、一三八一（康暦三）年の、明照寺と同形・同月日の板碑が現存する¹²。長命寺は「足立山」の山号を持ち、野田姓を名乗っている。西祐は井上氏とともに、武蔵国も野田近辺にいたのかもしれない。

南北朝時代の信濃には、飯田の寂円・善教などを中心とする門徒団、常陸法善の法系に属する塩崎康楽寺などの門徒団、下総善性系の浄興寺・磯部六ヶ寺を中心とする門徒団の三つがあり、室町時代には後の二つが二大系列を成したが、長命寺は何れにも吸収されなかった¹³。それ自体、誰かしら親鸞直弟を祖とすることを暗示するが、さらに注目されるのは、磯部六ヶ寺も、井上氏が関東に領地を持っていた頃にその地で真

宗に帰し、井上氏が南北朝の兵乱によって信濃に引き上げたときに、信濃に移ったと考えられていることである¹⁴。西念が井上一族だったかどうか、また、西祐が西念・覚念の正統の後継者と認められていたかどうかは別として、武蔵で西念の門流にあつた西祐が、井上氏の撤収に随伴して来て、信濃に長命寺を開いた可能性は、かなり高いのではないか。

もうひとつ、いわゆる「唯善事件」（一三〇一〜〇九年）の影響も考えねばならない。親鸞の孫で覚恵の異母弟である唯善は、京都大谷の親鸞廟堂の相続権を主張して覚恵・覚如父子と対立したが、青蓮院の法廷で敗訴した。覚如はこれ以後、本願寺の基礎固めに邁進し、唯善を推した横曽根門徒や荒木門徒は急激に勢力を喪失して、本願寺に吸収されたり、西国に拠点を求めたりせざるを得なかった¹⁵。覚念が唯善側であれば、その次代に当たる西祐が、関東での活動に限界を感じた公算も大きいと思われるのである。

三 武蔵国における退転と再興

武蔵国の西念旧跡寺院として、早くから名の挙がるのは、東派の辺田西念寺・古河宗願寺¹⁶の両寺である。

本山側は、これらの寺院を、長命寺に先んじて西念旧跡寺院と認めた。一六七八（延宝六）年に成立した『二十四輩名位』（光瀬寺乗恩伝）には「西念 覚念。武州太田、一本野田。今古河宗願寺」とあり、一六八一

(延宝九)年以降に書かれた『二十四輩次第記録』では「武蔵国野田西念御房ノ跡、退転以後裏方ニテ取立、下総国猿島郡辺田村西念寺ト申居住ス。又表ニテ近年信州布野長命寺、西念御房ノ跡相続ス」とされている¹⁷⁾。

宗願・西念両寺の成立事情を、『二十四輩散在記』¹⁸⁾は次のように説明する。

武蔵国野田村西念寺トテ、西念御房ノ起立ノ寺、繁昌也トイヘトモ、乱世ノ砌逐電退転セリ。故ニ下野国猿島郡辺田村聖徳寺ヘ引寺トシテ、聖徳太子ヲ改メテ(昔ハ天台宗太子暫居地也。信証ノ代真宗トナル)、延宝年中ニ西念寺(東派)ト御免アリ。此時ヨリ二十四輩ノ内ニ入、十五石ノ御朱印地也。右聖徳寺ハ、真証御房トテ祖師ノ御直弟ニテ当寺ヲ開基セリ。

親鸞直弟信証の開いた辺田聖徳寺は、延宝年中に武蔵国野田村西念寺を「引寺」して「西念寺」となり、二十四輩旧跡寺院の地位を許されたというのである¹⁹⁾。

また、一六九一年成立の『叢林集』巻九「二十四輩之定」²⁰⁾には、「宗願寺 武蔵国古賀郡野田。中比縁乱退転矣。其時下総国猿島郡辺田村聖徳寺ヘ引取シテ、延宝年中改号西念寺」とある。

以上の史料から推察すると、西念が開いた武蔵国野田西念寺は、いつとも知れぬほど昔に退転したが、一六七三〜七八年に、信証の開いた極楽山聴衆院聖徳寺に「引寺」する形で復興された。そうして生まれた「二十四輩第七番、野田西念の旧跡寺院」が、極楽山聴衆院西念寺・足立山

野田院宗願寺の両寺だということであろう。

引寺とは、廃寺となった寺院の寺号を用いて寺院を創設することをいう。江戸幕府は新寺造立を厳しく制限したので、新しく寺院を作ろうとしたり、寺格を持たぬ道場が宗判寺院化を望んだりした場合は、新寺ではなく古跡だと主張する必要があった。関東地方では「親鸞直弟旧跡の復興」が、こうした際の格好の名目となり、多くの真宗寺院が復興という名の新寺造立を行っている。ある親鸞直弟の名跡を、法系上は全く無関係な寺院が引き継いで、新たな一寺を興すことも、江戸時代にはごく一般的であった。

しかも、二十四輩はただの親鸞直弟ではない。南北朝の頃には「二十余人の直弟たち」を言うにすぎなかったが、中世末までに「本願寺の基盤を作った覚如が、正しい教えを伝えていると認めた親鸞直弟二十四人」を指すようになり、江戸時代には、本山から二十四輩旧跡寺院と認定されれば、それ相応の教団内身分が許された。東派では平僧・飛檐の上位、西派では平僧・国絹袈裟・飛檐・初中後の上位に位置づけられたので、身分上昇のためには改派も辞さなかった江戸時代の真宗寺院には、大いなる魅力であった²¹⁾。

聖徳寺を開いた信証は、横曽根門徒の祖、性信の法系にあつたようである。群馬県邑楽郡板倉町の真言宗宝福寺は、一五世紀半ばまで真宗佐貫法福寺として、性信の影像が尊重され、修理も加えられてきたことが判明しているが、性信門弟の唯信が一二九三(永仁元)年に作った阿弥

陀木像の墨書銘に「画工上野国板倉信証」とあるという²²⁾。宗願寺蔵『古河御坊略縁起』は江戸時代末の作と推定される木版刷で、「建武乱で武蔵国足立郡野田の長命寺が退転したため、上野国邑楽郡大同山法福寺に避難し、そこから一三四二（康永元）年に下総国葛飾郡古河に移って足立山野田院宗願寺と号した」との内容を持つ。

西念寺と宗願寺はともに聖徳寺の後身で、一方がもう一方の掛所・隠居所のようなものだったのだろうか。法系の差が意味をなさなくなつて久しいころ、西念とは別の門流の末裔たちが、「親鸞直弟二十四輩」の名を欲して、西念の旧跡復興を果たしたのである。

四 武蔵国における、長命寺旧蔵「親鸞木像」の発見

武蔵国北葛飾郡木売川戸村にも、西念旧跡寺院が誕生した。津田大浄が一八二八年に著した『遊歴雜記』初編中巻六〇話によれば、ことの発端は万治年中（一六五八〜六二）、真言宗西光院の境内で土がむくむくと盛り上がり、一体の僧形木像が掘り出されたことに遡る。誰の像とも判らぬまま安置されていたのを、元禄年間（一六八八〜一七〇四）に本法寺良秀が親鸞寿像と鑑定した。この「おむく」像は合掌型で、通例の親鸞像とは大違いだが、正徳初年に別に小堂が建立され、毎春の御取越に江戸から大勢が群参するようになった。西光院は親鸞直弟西光坊浄善以来、血脈相統してきたが、文禄・慶長の乱世に、宝物を土中に隠し埋め

て無住となり、他宗の旅僧が真言宗西光寺と改めたものという²³⁾。

中世が終焉を迎え、各寺を支えていた豪族的武士団は勢力を失つていった。また、江戸幕府は、寺領の固定化・削減策を進めたので、寺院は自ら広く衆庶に訴えて資金を集め、堂宇の維持に努めなければならなくなつた²⁴⁾。良秀と西光院の企ては当たり、巨大都市江戸に住む多数の真宗門徒の誘引に、成功したのである。

信濃国布野長命寺の一三世靈勝が、東国の親鸞旧跡を廻る旅に出たのは、この鑑定騒ぎの直後であつた。靈勝の曾祖父は塩崎康楽寺の生まれなので、親鸞伝絵に関する康楽寺の秘伝の書を所持していた。康楽寺は、覚如が伝絵を作つた際に絵を描いた「画工康楽寺浄賀」の寺とされるので、こうした書も伝わっていたということなのである。靈勝はこれに、自分の目で見た旧跡のさまを加えて、一六九五（元禄八）年に「御伝絵説詞略抄」を著した²⁵⁾。この書に紹介された旧跡は、越後国府をはじめ、稲田西念寺・栗山光明寺・松原上宮寺・国府津真楽寺など多数に上る。西光院を訪れたとは明言していないが、「おむく」が脚光を浴びる様子に感じ入ったことは間違いない。東国各地に残る親鸞像を列挙したなかで、こう述べている。

武蔵国足立郡野田村西念房安置ノ御映像ハ、聖人八十八歳ノ御自作ニテ、スナハチ西念ニクダサル。シカルニ、建武ノ乱ニ寺廢シテ、凶賊ウバヒトリテ、ユキガタヲシラズ。ノチニ同国ニ郷半河戸村西光院トイフ真言宗ノ寺ニマシマス。イマニコノ寺ニ安置シテ、毎月

二十八日ニ開帳シテ、諸人コゾリテコレヲ拝ス。西念、姓ハ源氏井上氏ノ人ナリ。信州高井郡井上村ニ住ス。聖人配所ニシテ御弟子トシタマフ。スナハチ給仕シテ関東ニユキ、武州野田ニ住シテ、正応三年、覺如上人御下向ノトキ、百七歳ニテ御メミエ申ス。覺如上人、スナハチ長命寺ト号ヲタマハル。西念ノ孫、本念房西祐²⁶ノ代ニ、寺廃ス。カルガユヘニ、西祐信州へ越テ、水内郡駒沢村ニ長命寺ヲタツ（イマハ同郡ノ布野村ニ住ス）。

靈勝は帰国後すぐに、親鸞木像発見譚を含んだ長命寺伝を作ったのである。靈勝の息勝応がまとめた、歴代住持の没年・事跡などの一覧では、靈勝は、布野から南堀に寺基を移した「中興開基」と称えられている。靈勝は新生長命寺の出発点となる人物であった。

【詞略抄】は、寺院が門徒衆を集めて親鸞伝を説き聞かせる際の台本である。寺院にとつては重宝な本であるだけに、一七〇五（宝永三）年に寂彦なる僧が書写したのみならず²⁷、一七二一（宝永八）年には京都仏光寺通堀川の書肆「井上七郎兵衛」から刊行された²⁸。この書肆はまもなく廃業したようで、板木は京都の正統的な「物の本屋」として名高い、杏林軒北村四郎兵衛の手に移っている²⁹。

先啓（「大谷遺跡録」の作者）や玄智（「大谷本願寺通紀」の作者）は、康楽寺・長命寺・正行寺などが親鸞伝絵の絵解き本を作り、「偽造」の記伝を広めていると、烈しく非難しているが、そのなかに【詞略抄】も含まれている³⁰。大手書肆から売り出された【詞略抄】は、学僧たちの怒

りをよそに世間に流布してゆき、「絵解き」を通じて、靈勝新作の長命寺伝を全国に知らしめることとなった。

さらに、一般門徒衆が読み、旅の案内書にも用いるような、真宗系寺誌類が次々に発行され、それにもこの内容の由緒が掲載された³¹。江戸時代中期には、庶民にも読書の習慣が広まると同時に、伊勢参宮や札所巡りなどの旅を楽しみ始めていた³²。真宗門徒も、檀那寺での法の聴聞とは別に、自ら本を読んで知識を蓄え、親鸞や直弟の遺跡・遺物を実見して、彼等と直接結縁しようとした。東西両本願寺が二十四輩旧跡寺院を特別に待遇したのも、巡拝隆盛への対応という一面があっただろう。

西光院もまた、無名の西光坊浄善を開祖と仰ぎ続けるより、西念旧跡寺院となる道を選んだ。靈勝の旅の前、一六九四年に編まれた「親鸞聖人御直弟散在記」には、「西光院という真言宗寺院の別字に聖人木像を安置し、毎月二八日に開帳供養している」としか書かれなかったものが、江戸時代末期の「新編武蔵風土記稿」所収の縁起や「親鸞聖人八十九歳無垢寿像略縁起」では、野田長命寺と「親鸞聖人直弟西念坊隠遁の霊場」である西光院とが、「祖師御影・西念の木像、かはるかはる」安置したとされている³³。

寺院経済の大きな部分を、一般参詣者の志納に依存する近世寺院は、中央で出版される寺誌類や、各寺が開帳時に頒布するパンフレットの威力を、充分に承知していた。有名な志向は、こうした点からも推し進められていたのである。

五 「下総国葛飾郡野田」説の成立

ここで再び、辺田西念寺伝を取り上げる。旧来の信証系の由緒や宝物と、新規に取り入れた西念系のそれとの折り合いを、どうつけるか。「二十四輩順拝図会」所収の辺田西念寺伝には「西念房の木像を安す。真証の像なりとも云」とあつて、開基信証木像を西念像と読み替えようとした跡が見られる⁽³⁴⁾。

明治期の『二十四輩第七番西念寺略縁起』は長文なので、概要を記す。

野田西念の俗姓は、信州高井郡井上城主、井上五郎盛長の子、井上三郎貞親である。親鸞から西念の名を賜り、武蔵国足立郡野田に太子堂を建立した。正応年中に関東に下向した覚如は、長寿の徳に感じて西念寺号を与え、西念は正応二年三月十五日に百八歳で往生した。弟の井上四郎義繁は円盛比丘といひ、辺田村の天台宗極楽山聴衆院聖徳寺の住持だったが、親鸞から名を信証と賜つて真宗に改めた。西念の孫の西祐の代に、建武の兵乱で野田西念寺が退転したので、宝物を辺田聖徳寺に納めた。聖徳寺一五世了伝は寛文二年に、西念寺と改号して二十四輩第七番の西念旧跡寺院となるよう、東本願寺琢如から命じられ、信証を西念寺二世、覚念を三世、西祐を四世とし、聖徳寺二世信慶を五世、聖徳寺一五世了伝を一八世と決めて、西念の正統はますます繁昌した。

二系統の由緒を一本化しようとする意志は、こうした形で結実した。

西念系の歴代（西念・覚念・西祐）と、聖徳寺の歴代（信証・信慶）を縄のようにあざない、西念・信証・覚念・西祐・信慶という「辺田西念寺歴代」を作り出す手法は、なかなか見事ではないか。

ところが、寺院の位置ばかりは移動させられないだけに、新しい由緒と整合性を持たせるのが難しい。辺田が武蔵国足立郡野田から離れすぎているとすれば、西念の故地を、辺田に近接する別の「野田」の地に持つて来てしまふしかない。

一六七一年、辺田に近い下総国葛飾郡野田では、花輪村名主高梨家が大々的な醤油醸造業を始動させていた⁽³⁵⁾。武蔵国足立郡野田は田園地帯で、世に知られるといえば「野田の鷺山」位であろう。世間の人々が、「野田」と聞けば「醤油の野田」と思うようになった時点で、西念の故地を下総国野田とする説が、市民権を得る素地は整っていた。

一九世紀を迎え、ついに下総国野田に「西念旧跡寺院」上花輪長命寺が誕生した。醤油樽屋の尊崇を受けてきた「浄土宗野田太子堂」が、辺田西念寺から宝物と由緒を譲り受け、西念寺と同じ「極楽山聴衆院」の名を戴く真宗寺院となったのである。

『遊歴雑記』第四編下巻三五話には、「野田村高梨の太子堂」が西光院と日を合わせて御取越を行い、参詣者を集めたとある。西光院の御取越には、木売村の農家は居風呂を二つ三つ並べ焚き、夜着布団を積み重ねて「御無垢の御真影の御奉公」を果す。参詣者の多くはこれらに一泊して江戸に戻るが、もう一泊して野田に行く者もいた。津田大浄は吉川の

宿で「吉川の町を北へ出離れ、行程弐里にして野田の太子堂へ行」と教えられている。

吉川から二里北方といえ、まさに下総国葛飾郡野田（名主は高梨氏）である。大浄はまた、真宗の宝物を安置する、武蔵・相模・伊豆の非真宗寺院七ヶ寺を挙げ、真言宗西光院とともに「武州埼玉郡野田村の太子堂（浄土宗）」もその一に数えている³⁶。

上花輪長命寺では、一六六二（寛文二）年に琢如の命で再建された西念寺が、一八二〇（文政三）年に中興開山悦山によつて長命寺と改称したと伝える。だが、寛文二年に琢如から西念寺号を受けたのは辺田西念寺なのだから、浄土宗「太子堂」は、文政年間に西念寺の由緒を導入し、浄土真宗「長命寺」となったのだらう³⁷。西光院では「野田西念の開いた長命寺が退転し」云々の縁起が説かれ、賑わっている。その大勢の参詣者を、「おむく」のふるさとして「野田の長命寺」に導きたい。これが、幕末になつて長命寺号を欲した理由であらう。

太子堂を支えて来た高梨氏も、西念との血縁関係を言うことには積極的だった。家伝によれば、野田高梨家初代は、相模守藤原親忠の女、貞操尼である。その弟（鹿島神社の初代の神主）は息子に西念の妹を娶らせた。信濃高梨氏の祖、井上次郎満実の息、高梨七郎盛光の三男が、野田高梨家に養子に入つて四代目となつたという³⁸。信濃の高梨氏は井上氏の支族で、源平合戦の頃から世に知られた名族だが、野田高梨氏は本来はこれとは別系統のようである。醤油醸造で名を成したとき、「信濃井

上氏の裔」になるために、西念寺に支払う宝物や由緒の譲渡料は、有益な投資ということだらう。

こうして、「野田」は下総国葛飾郡野田を指すとする説は、武蔵国足立郡野田と同等か、むしろそれ以上に強力な説となつたのである³⁹。

おわりに

布野長命寺が「野田西念旧跡」を主張し始めたのは意外に遅い。一六六九年に西光寺祐俊は二十四輩旧跡寺院七ヶ寺を掲げ、「右七ヶ寺ハ爾今御年忌等二当御本寺へ参詣被仕候。其外ハ或ハ其家断絶シ、或東方也」と記したが、西念旧跡はこの七ヶ寺に含まれない⁴⁰。一六八一年頃の「二十四輩次第記録」が初めて長命寺の名を載せ、「武蔵国野田西念旧跡は退転し、東派で辺田村西念寺として取り立てられた。西派では近年、信州布野長命寺が西念房の跡を相続した」としたのは、前述の通りである。

しかし、長命寺は西念開基を伝えていなかったわけではない。西念の法系にある西祐が、南北朝期に信濃に開いたと推定できるだけでなく、長命寺の下寺西照寺が、東西分派期に長命寺に背いて東派につき、越後に去つたが、この寺も野田西念開基を伝えている⁴¹。一六世紀半ばすぎに上杉氏の保護を受けて越後に移り、同氏の移封に従つて一五九八年に会津、さらに米沢へと移つた同名の長命寺も、塩崎康楽寺伝の影響を受けて変形してはいるが、基本的に同内容の由緒を持つ⁴²。信濃を離れて

から長命寺と連絡を持った形跡のない両寺が、西念系の由緒を説く以上（むろん西光院との関りは説かない）、長命寺は西念による開創譚を声高に説かなかただけで、持つてはいたのである⁽⁴⁾。

師から弟子へと法が受け継がれていたころ、「衆」の一員でない者には、由緒も、宝物も、本尊の加護も無縁だった。近世には、由緒は公開され、誰もが多くの寺院の由緒に触れて信心を深めたり、知的好奇心を満足させたり、見世物を楽しむようなひとときを過ごしたりするようになった。寺院の方も、寺院経済を支え、寺号・上位の教団内身分・他寺に対する優越性などを確保するために、由緒を大々的に説きたてた。知りたい、参詣したいと願う者、知らせたい、参詣させたいと願う者、両者の願望があいまって、長命寺にひっそりと伝わってきた「野田西念」の名は、一七世紀末に本願寺に上申されて「二十四輩旧跡寺院」の地位をもたらし、まもなく出版界デビューを遂げて全国に鳴り響いた。

最後に、旅と出版の力を存分に利用した布野長命寺伝が、逆に利用されたさまを、丹波国野花の瑞華山長命寺伝に見ることにしよう。長文なので要旨のみ掲げる⁽⁴⁾。

井上次郎道祐西念坊は、信州南堀長命寺の開基である。平家の落武者、矢野五郎は、親鸞に帰依して教念と名乗り、丹後木子村の山中に隠れていたが、当地の小田加賀守貞治が教念寺を建てて住持に招いた。西念は教念を慕って東隣に住んだが、後に下総国葛飾郡野田村に西念寺を開き、長寿の徳で覚如より長命寺の号を賜った。西念

の草庵は長命庵といい、教念の子孫が相続したが、後に故あって小田家は宝物を持つて教念寺から離れ、長命庵は長命寺と改めて、本願寺直末寺院となった。

小田家は中世から続く名家だが、何らかの事情で教念寺の護持から手を引き、境内の長命庵を独立させて祖先祭祀などを移した。一寺となつたからには、独自の「由緒」が要る。「長命」の名から、南堀長命寺（元禄年間に布野から移転）の同門と付会した契機は、旧跡巡拝の旅だろうか、出版文化の享受だろうか。

靈勝は「詞略抄」の末尾で、東国に残る親鸞像の由緒を語り、「聖人御修行ノ地」である東国に、多数の遺像があつて不思議はないと断言した⁽⁵⁾。その像は本当に「真作」なのか、その物語は「偽造」でなく「事実」なのか、ましてや本願寺が真作である、事実であると認めているかどうかなどということは、意に介さない。参詣者の方も、沢山の寺院を巡るうちには、いかにも疑わしい由緒や、相互に矛盾する二ヶ寺の由緒に、出会う折りがあつただろう。全てを頭から信じきっていたとは思われない。自分は親鸞の踏んだ土を踏み、自分の目で尊像を見、自分の耳で由緒を聞いている、その実感をもつて、親鸞と直接につながっている。近世寺院は、「由緒」を利用して、そういった一般門徒衆の気持ちをつえ、身分制社会を生き抜こうとした。各地に散在する「西念旧跡寺院」は、彼等の情報収集と創作活動が生み出したものなのである。

注

- (1) 『真宗史料集成』第一卷、同朋舎、一九七四年
- (2) 平凡社歴史地名体系『埼玉県の地名』
- (3) 後述の通り、ここに挙げた全ての寺院が西念に直接由来するものではない。また、これらの寺院から分出した寺院が、西念旧跡を説くこともある。
- (4) 拙稿「真宗寺院の由緒書における「開基」と「二世」の関係」、『日野照正博士頌寿記念論文集』歴史と仏教の論集、自照社出版、二〇〇〇年。「由緒書における寺院開基伝承について」、『仏教史学研究』四三—二、二〇〇一年
- (5) 本稿ではAとBのみを分析対象とする。Cは戦国時代の末から、A・B両系統と関係を持ちつつ、積極的な西念旧跡復興運動を繰り広げるのだが、紙幅の関係で省略する。
- (6) 本稿では同名異寺の「長命寺」を扱うため、この信濃国の長命寺を指すときには、南堀移転後も含めて「布野長命寺」もしくは単に「長命寺」と言い、他の長命寺（武蔵国足立郡野田長命寺・下総国葛飾郡上花輪長命寺・丹波国天田郡野花長命寺）はそれぞれ「野田」「上花輪」「野花」を冠して言うことにする。
- (7) 一九一一年の親鸞六十五遠忌に際してまとめられた写真帳に、翻字されている。門流の祖、西念による武蔵国野田長命寺開創譚の後に、西祐による布野長命寺開創譚を付加するといった、伝統的な真宗寺院の由緒書の形である。
- (8) 『真宗重宝聚英』第三卷・第九卷。
- (9) 宗誓が一六九三（元禄六）年の巡歴に基づいて翌年に編纂したもので、一七一一年に刊行された。『真宗史料集成』第八巻所収
- (10) 『浦和市史』通史編Ⅰ、一九八七年
- (11) 中野田地区自治会長田中正二氏談。浦和市域には諏訪社が多く、下大久保の諏訪社は、一三六九（応安二）年の「大窪郷地頭方三分一方田畠注文」にも出る古社である。
- (12) 『浦和市史』古代中世編Ⅰ、一九七七年

信濃国布野長命寺伝の成立

- (13) 千葉乗隆「信濃真宗寺院成立の系譜」、『宮崎博士還暦記念 真宗史の研究』。ただし、米沢長命寺は康楽寺の隠居寺を自称している。また、西光寺古記「慶長十六年坊主衆聞書」の「信濃ニテノ座配ノ次第」に「康ノ下長命寺」とある。戦国時代末期か江戸時代初期には、塩崎康楽寺と深い縁ができたようである。
- (14) 井上鋭夫「一向一揆の研究」吉川弘文館、一九六八年。井上勝「勝願寺の歴史」一九九五
- (15) 吉田清「初期真宗教団と東国門徒」、『仏教史学研究』二七—二、一九八五年。小山正文「真宗の善導像と法然像」、『親鸞と真宗絵伝』法蔵館、二〇〇〇年
- (16) 現在は西派に属するが、『古河御坊略縁起』によれば、一七二〇（享保五）年まで東派に属していたらしい。
- (17) 両書とも『真宗全書』六四所収
- (18) 『真宗全書』六四。一六九四（元禄七）年頃に成立したと考えられている。
- (19) 『真宗全書』六四。この後に「宇野七郎頼親ノ三男、同三郎源貞親ト号ス。始ハ空師ノ御弟子、後聖人ニ帰ス。勢州大別保村八葉山光明院本寺ニ住ス」という文章があり、伊勢国大別保の八葉山光明院本福寺との関係が推察される。
- (20) 『真宗史料集成』第八巻
- (21) 拙稿「真宗寺院における開基伝承の変化——「法系」から「教団内身分」へ——」、『真宗研究』四四、二〇〇〇年
- (22) 小山正文「初期真宗門侶の一考察——特に埼玉県竜蔵寺、長福寺蔵阿弥陀像銘を中心として——」、『高田学報』六六、一九七七年。
- (23) 『遊歴雜記』は三弥井書店の影印による。西光坊浄善による西光院開創と後世の荒廃や、良秀の鑑定は、真宗系寺誌類になく、『遊歴雜記』のみに出る記事だが、大浄は本法寺（東京都文京区）の寺中である覚念寺の坊主なので、でたらめを書いたとは思われない。真宗系寺誌類は先行出版物をそのまま引き写す傾向が強く、最初に書かれなさと二度と載らなくなることもあるが、学僧たちが「おむく」を親鸞像とするのを躊躇したため、「親鸞直弟旧跡」とも言えなくなつたというのが、実際のところだろう。「おむく」の写真は『浦和市史』第二巻に載るが、面貌も姿勢も通例の親鸞像

とは全く異なっていて、『大谷遺跡録』がこの木像に「不審」の念を表明したり、『道徳法輪集』が「又一説アリ、サダカナラズ云々」と言うのも無理はない。大淨は、良秀が鑑定の札に、腐って落ちた「おむく」の手首を貰い受けたと記しているが、本法寺現住職の藤原正麿氏によれば、「通達院長秀」は同寺の七世として確かに存在するものの、「おむく」に関する伝承や手首は伝わっていないという。なお、西光坊淨善の素性は不明である。『親鸞聖人八十九歳無垢寿像略縁起』には「西念と同宿の性海」なる人物が登場するが、性海は性信の門下にいるので（今井雅晴「蓮如と北関東の浄土真宗」『講座蓮如』六、平凡社、一九九八年）、西光院も横貫根門徒の系統にあつたのかもしれない。

- (24) 比留間尚「江戸の開帳」吉川弘文館、一九八〇年。鈴木良明「近世仏教と勸化」岩田書院、一九九六年

- (25) 布野長命寺蔵の刊本（『和光大学表現学部紀要』二〇〇二年度版にて翻刻を予定している）の第五巻の巻尾に「右此書者、有康樂寺家伝之私記并別録。拾其中、而作繪詞略抄。是偏為愚蒙初心、以丸合繪令知之也。予曾祖父了勝者、塩崎康樂寺十二世淨念子也。嗣長命寺。依之私記別録等所持之。殊更予巡見関東、而拝于祖師御旧跡、詳書記之畢。今依懇望、不顧不弁卑詞、編集之呈机下。努々不可有他見者也。元禄第八歲次乙亥仏滅日、信州水内郡布野県于長命寺、沙弥乾外靈勝謹誌焉」との跋がある。後述の通り、刊行に先んじて寂彦による写本が作られているが、両者には内容的な差はほとんどなく、若干の誤字・脱字のほか、写本は漢字を多用するが刊本は仮名中心といった、表記上の差が見られるに過ぎない。本稿は、由緒が公開されることで他寺の由緒に影響を与えてゆくさまを見てゆこうとするもので、『詞略抄』を引用する場合には、刊本に依ることとする。

- (26) 寂彦の写本は「本念房」を欠く。

- (27) 同朋大学仏教文化研究所蔵。二巻一冊。下巻の巻尾に「于時宝永二年乙酉曆孟春日／願成口事也／寂彦書之（花押）」とある。

- (28) 第五巻の末尾に「宝永八年辛卯年正月上元 書肆井上七郎兵衛板行」との刊記がある。

- (29) 宗政五十緒氏「北村四郎兵衛の蔵板書」によれば、安永六（一七七七）年再刻『増補和歌題林抄』の「杏林軒蔵板目録」に「御伝抄詞略抄五冊」

とあるという。杏林軒は、明治にいたるまで、往來物をはじめとする多様な書物を発行し続けている（『近世京都出版文化の研究』同朋舎、一九八二年）。

- (30) 先啓『御絵伝指示記』（『真宗史料集成』第七巻）、玄智『考信録』（同第九巻）など。本山による宗祖伝の独占と、信濃からの「秘伝」の発信のさまが窺える。井上七郎兵衛は、康樂寺をはじめとする信濃國諸寺の親鸞伝作成活動に、深く関わっている書肆である。『総説親鸞伝絵』（日下無倫、史籍刊行会、一九五八年）によれば、信州松本隠通某作「御伝絵解」八巻四冊（龍谷大学蔵）が、一七一六（正徳六）年に皇都書林仏光寺通堀川西へ入町鎰屋井上七郎兵衛・醒ヶ井通五条上ル町金屋小佐治半七郎・油小路通五条下ル二町目白粉屋藤江武兵衛によつて刊行されており、その刊記に「親鸞聖人行状記全部十巻近日出来仕候」云々とある由である。この書は現在所在不明となっているが、同朋大学仏教文化研究所に「御伝絵解」八巻二冊（第八巻巻尾に「時正徳二壬辰一陽来復日／信州松本隠通七十野僧謹誌」とあるが、井上七郎兵衛などの名の入った刊記は削られている）が蔵されているのでこれを見ると、「御伝絵解」は「詞略抄」刊本に全面的に依拠しており、特に第二巻は、個々の語句から改行・句点・合点にいたるまで、ほとんど「詞略抄」そのままであることがわかる。『親鸞聖人行状記』（二巻二冊。同朋大学仏教文化研究所蔵）は、表紙見返し「信州松本正行寺（俗称佐々木四郎高綱）本紀 同塩崎康樂寺（西仏坊）遺編／浪速書林称航堂梓行」、第一巻巻首に「信州松本正行寺了雲本紀 同国塩崎康樂寺淨超遺編」とある。以上の事実を総合して考えると、井上七郎兵衛は一七一一年一月に「詞略抄」を出版し、翌年には松本隠通某に、これを引き写した形の「御伝絵解」を執筆させて一七六六年に出版、その年か翌年には松本正行寺・塩崎康樂寺による「親鸞聖人行状記」を出版したものと想像される。学僧たちが糾弾する康樂寺一派の活動は、本願寺の目と鼻の先にある書肆、井上七郎兵衛が、執筆の段階から関与することで成立したのである。この書肆はこれ以後は姿を消してしまい、板木は、「詞略抄」は京都の北村四郎兵衛、「行状記」は大坂の称航堂柏原屋与左衛門（幕末まで営業）、「御伝絵解」は、まだ実見して確認をしていないが、同じく京都の丁子屋庄兵衛の手に移つたらしい（大谷大学図書館「楠丘文庫目録」

による)。丁子屋庄兵衛は丁子屋九郎右衛門(法藏館の本家に当る)の分家と思われるから、結局三種の親鸞伝の板木は大手の書肆に買い取られ、発行され続けたことになる。

- (31) 一七三一年刊『御旧跡二十四輩記』には「長命寺第三世西祐ノ代ニ建武ノ乱ニ寺破却ス。(中略)此時西祐ノ伯父西光院ノ住職タリ。彼両軀ノ木像焼失センコトヲ恐レテ、河戸村ヘ持シ来リテ深田ニコレヲ隠シタリ。年ヲ超ヘテ後世静謐ニ属スル比、聖人ノ木像ヲ埋メシ所地ムクムクトウゴメク。(中略)其後長命寺代四世了順、信州ヨリ来リテ両軀ノ木像ヲ求ムトイヘドモ、尊像ハ靈驗アラタカニシテ諸人渴仰スルニヨツテ与ヘズ、西念房ノ像ハ与ヘタリト云々」とある。西光院での「おむく」の出現を、室町時代の了順代に遡らせており、『二十四輩第七番長命寺略縁起』の原型がすでに出来上っている。

- (32) 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇一年。「越後水原略道中図」(仮題。山下和正『江戸時代古地図をめぐる』NTT出版、一九九六年)は、巡拝して来る真宗門徒に、宿屋が配布した案内図の一例である。

- (33) 『新編武蔵風土記稿』(『大日本地誌体系』雄山閣、一九二九年)は一八二八年成立、「親鸞聖人八十九歳無垢寿像略縁起」(『新訂増補埼玉叢書』六、一九七二年)は成立年不明だが、江戸時代末期の作である。

- (34) 専教寺了貞編、一八〇三年刊。『真宗史料集成』第八巻。

- (35) 『野田市史』

- (36) 初編下第一話。『遊歴雜記』の「下総野田」は、「武州野田」の意である。

「野田村高なし」という表現や吉川北方二里という位置からして、大浄は下総野田を武州と勘違いしていたとしか考えられない。

- (37) 一八〇五(文化二)年「重修花輪太子堂記」。市山盛雄著『野田の歴史』崙書房、一九七五年

- (38) キッコマン醤油株式会社編『キッコマン醤油史』一九六八年。高梨家菩提寺である桜台観音堂の縁起は、前段は辺田西念寺伝と細部まで一致し、後段は高梨家伝と似ている(岩井市幸田新田の今井清氏の御教示による)。

- (39) 本稿で扱った寺院の所在する市町村の市史・町史類は、みな両論併記で

ある。

- (40) 「法流故実条々秘録」の「二十四輩之事」(『真宗史料集成』第九巻)。聖徳寺は一六七三〜七八年に引寺したので、これは「東方」でなく「断絶」を指すと思われる。

- (41) 西照寺了因『西照寺略縁起』一七四三(寛保三)年

- (42) 米沢市立図書館蔵『天明以来代々勤書』所収「当山由緒書上言上書」。米沢長命寺は、布野長命寺の旧地、駒沢に残った「長命寺」の後身と思われる。

- (43) 由緒書を史料として用いる際に、ある記事が、成立年時の古い由緒書には出ず、新しい由緒書には載っている、ということ根拠にして、「この記事は〇〇年以降に持ち込まれたものだ」と判断しがちである。注意すべきことであろう。

- (44) 『天田郡志資料』上、一九三六年

- (45) ソノホカ、聖人ノ御影像、アマタ自宗他宗ノ寺ニ安置ス。聖人二十五年ノ星霜ヲ、関東三経タマヘハ、御弟子ノ人々、恋慕シテ彫作シタマツリケルニヤ、常陸・下総・上総・上野・下野・出羽・奥州・安房・相模・甲斐・信濃・越後・越中・越前・加賀・三河・尾張・伊豆・駿河・遠江・伊勢・近江、コノ国々ハ、聖人御修行ノ地ナリ。

付記 多くの寺院の御住職・坊守の皆様はじめ、各市町村教育委員会や郷土史家の方々から、多大な御協力を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。